

土木学会四国支部「土木紀行」No.66

吉野川市美郷の石積み

徳島県吉野川市美郷地区に、何層にも積み重なった石積みの段畑で有名な集落がある(写真1、2)。いつごろからここに積まれはじめたのかは定かではないが、300年以上前から築かれたとされている。ここには4軒の家があり、そのいずれもが高開という姓を名乗ることから「高開の石積み」とも呼ばれている。

斜面に家や畑、田んぼを築いて住む、というのは徳島の中山間地の特徴ではあるが、ここは幹線道路となる193号線からも車一台がやっと通れるような道しかない、いわば不便な場所である。その道も、今から数十年前に集落の人たちが畑を持つ人々と交渉し、用地を確保して自分たちで作り上げた道だそうである。

現代の感覚からすると「なぜこんな不便なところに…」と思えるのだが、ここに通い始めてさまざまな季節に訪れてみて、その理由が分かってきた。それは南向きの斜面で日当たりが良いこと、そして谷筋を流れる川から遠く、空気が乾燥していることである。深い軒の下では季節ごとにさまざまな保存食が作られる。畑でつくった蕎麦の乾燥や、干し芋、切り干し大根などである。冷蔵庫のなかった昔、一度に大量にできる農作物を保存するためには、乾燥が最も合理的だった。その「乾燥」という作業に適した場所が山の上の斜面なのである。

石積みは、地形に合わせて有機的に線を描いて複雑に組み合わさっている(写真3)。大きく見れば、地形が谷状になっているところ、等高線で言えば凹んでいるところに畑が作られ、地形が出っ張って



写真1 高開の集落を見上げたところ



写真2 高開集落の畑



写真3 複雑な曲線を描く石積み

るところに家が建っている。これは、窪んだところには水や土砂が集まりやすく土の層が厚いため、畑に適しているからで、反対に出っ張っているところは岩盤が近く、家を築くのに適しているからだそうである。地形に寄り添うように集落が存在していることがよく分かる。

現在、この集落には5人の高開さんが住んでいるが、そのうち男性は一人だけで78歳になる高開文雄さんである。高開文雄さんは、石工でもあり、この集落全体の石積みを手入れしている。石積みは、長いものであれば100年以上は持つが、ところどころ緩んできて積んだ面が膨らんできたり、大雨などで崩れてしまったりしたところの補修が必要のため、毎年10カ所程度の積み直しを行っている。このような段畑や棚田の風景は日本の伝統的な風景として評価され「残したい」と言われることも多いが、実際には相当な労力と石積みの技術がなければ残すことはできない。筆者は景観工学を専門としているが、こうした風景の裏側にある労力や技術を知ったうえで「保全」について考えるため、毎年景観工学を勉強する学生や若手の社会人を集めて石積み体験合宿を行っている(写真4)。体験と言っても3泊4日の泊まり込みで崩し作業から仕上げまでを行う本格的なものである。私も含め参加者はみな、石積みの大変さを知ると同時に積む楽しさの虜になっている。

高開の魅力は石積みだけでなく、季節ごとに石積みを彩る花にもある。もっとも有名なのは4月のシバザクラである(写真5)。この季節には多くの観光客が訪れる。シバザクラと同時にハナモモやボタン桜なども楽しむことができる(写真6)。また10月には、ごつごつとした石積みの畑一面に、白い可憐な蕎麦の花が咲く様子も見ることが出来る。

どの季節もすばらしいので、ぜひ一度訪れてみて欲しい。

執筆：徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部 助教 真田純子

土木学会四国支部「土木紀行」 <http://doboku7.sakura.ne.jp/kikou/kikou.htm>
土木学会四国支部 <http://www.jsce7.jp/>



写真4 石積み体験



写真5 4月のシバザクラ



写真6 10月の蕎麦の花